

概 要

【研究背景】

フットトラブルをそのままにしておくと転倒や歩行困難に陥り、生活圏が狭まりQOLの低下を招くと言われている。在宅までつなぐ予防的フットケアが重要であり、それを実現させるには患者のセルフケア意識が左右する。フットケア指導をすることで足へのセルフケア意識が向上するのではないかと考えた。

【研究目的】

回復期リハビリテーション病棟入院患者に対しフットケア指導による患者の足へのセルフケア意識の変化を調査する。

【研究方法】

1. 調査対象：A病院回復期リハビリテーション病棟入院患者43名
2. 調査期間：2018年5月～9月
3. 介入方法：入院時に介入群・対照群に分け、入院時・1ヵ月後に足の状態を評価。介入群にはパンフレットを用いて週2回の入浴後にフットケア指導を1ヵ月間実施
4. 調査内容：基本属性、関連要因、認知症日常生活自立度、リハビリ休止回数、FIM、フットトラブル10項目、セルフケア行動評価尺度のフットケア部分¹⁾
5. 分析方法：各調査項目を2群に分け、t検定などで分析・比較（有意水準 $p < 0.05$ ）
6. 倫理的配慮：A病院倫理委員会で承認を得た。対象患者には同意書にて同意を得た

【結果】

介入群は22名、対照群は21名であった。介入群のうち足のチェック回数が増えた患者は12名（54.5%）で有意に多かった。

この12名は同群の変化がなかった患者に比べFIMの歩行・車椅子移動の項目が有意に向上した。そのうち7名は靴の中のチェック回数も入院時より有意に増加した。また、1ヵ月後足の爪切りが介助から自立になった患者4名は、FIMの認知項目が向上していた。フットトラブルを抱える患者は43名中37名（86%）で、これまでフットケア指導を受けた患者は1名であった。

【考察】

フットケア指導によって足や靴への関心が高くなりセルフケア意識は向上し変化がみられた。変化があった患者は歩行・車椅子移動のFIM点数が向上しており、リハビリの影響はあるものの、フットケア指導が立位・歩行能力の向上に効果的だった可能性が考えられる。また、足の爪切りが介助から自立になった理由として、FIM認知項目が向上しフットケア指導によって足への関心が高まったことが推察される。フットケア指導をこれまで受けた患者は少なかった実態から、在宅へと繋ぐ回復期リハビリテーション病棟看護師の役割は大きく今後の課題であると考ええる。

【結論】

短期間・短時間の統一したフットケア指導によって、患者の足へのセルフケア意識は向上することが示唆された。

【引用参考文献】

- 1) 大徳真珠子他，セルフケア行動評価尺度SDSCAの日本人糖尿病患者における妥当性および信頼性の検討，糖尿病，2006。